

日本文学部会

【概要】

松岡智之*

2018年12月10日（月）の午後、第13回国際日本文学コンソーシアムの日本文学部会が開催された。コンソーシアム全体のテーマは「いのち・自然・社会」である。大学院生4名、教員2名の報告があった。

1. ギュモ・オリアヌヌ（パリ・ディドロ大学院生）

「伊勢物語における笑い：人物と語り手との関係」

2. 馬如慧（北京外国語大学院生）

「『源氏物語』における「中の品」女性論—「葎の門」を手掛かりに」

3. トムシュー・アダム（カレル大学院生）

「中古と中世文学における竜宮訪問のモチーフの変遷」

4. 胡睿慈（国立台湾大学院生）

「『空華集』の絶句における「茶」の表現—空間の変化をめぐる—」

5. 朱秋而（国立台湾大学教員）

「幕末詩人館柳湾詩における自然描写—中国詩との比較を通して—」

6. 范淑文（国立台湾大学教員）

「作家に語られた震災—多和田葉子を中心に」

ギュモ・オリアヌヌ氏は、『伊勢物語』を「笑い」の観点から論じた。『伊勢物語』における笑いの要素の存在は、従来指摘されていたが、近年は主要な論点になっていなかった。作品における笑い

の要素の意義づけが論者の恣意に流れがちであったからである。これに対し、語り手の評言と物語内容との関係に着目すると、笑いの質を着実に考察できることを、『伊勢物語』の定家本第40段（「すける物思い」章段）を具体例として論じた。主人公の若者の行動と、老人（翁）の立場を取る語り手との認識の齟齬において、おかしみが作品内に形成されていることを指摘した。

馬如慧氏は、『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定の場面に示される、荒れた寂しい屋敷にひっそりと暮らす素敵な女性がいるという、平安時代の男性貴族のロマンチックな幻想（妄想？）を取り上げた。馬氏は、雨夜の品定では屋敷の荒廃の象徴として、繁茂する「葎（むぐら）」があるが、中国の伝統的な文学表現では葎よりも蓬（よもぎ）が一般的であったことを示した上で、中国で蓬が茂るような家に隠れていると観念されたのは、美女などではなく賢人であると指摘した。和歌を資料に陋屋の美女の観念が平安時代に入って定着したこと、一方屋敷の荒廃を「葎」で表すのは『源氏物語』以降であると論じた。『源氏物語』は男性の陋屋の美女幻想を女性作家が初めて取り入れた例であり、男性にとって都合のよい女性を求める男性の理不尽さが読者に伝わるように語られていると結論した。

トムシュー・アダム氏は、奈良時代から近世前半の御伽草子に至る浦島伝説の文学を取り上げ、浦島子の訪れる異界が、常世ないし蓬莱山から竜宮に変わることを問題とした。浦島伝説と浦島伝説でない竜宮訪問譚との話型的類似性を論証し、

*お茶の水女子大学准教授

さらに認知意味論という「百科事典的意味」を取り上げる。語が意味を成すには構造化（スキーマ化）される文脈が必要であり、物語は時間・空間的に構造を有し、そうした意味で認知のフレームになり得、浦島伝説の文学化における蓬莱から竜宮への連想的移行は、物語的認識を考える上での恰好の例であることを論じた。質疑応答では、常世や蓬莱と竜宮とに関する歴史文化的観点からの質問が出され、それに対するトムシュー・アダム氏の応答によって、日本の古典文学を理解するための方法的ツールとしての認知意味論的分析方法を鍛える報告者の意図が明瞭になった。

胡睿慈氏は、南北朝時代（室町時代前期）の臨済宗僧義堂周信が茶を詠んだ漢詩（絶句）を取り上げた。まず、茶を詠んだ詩は、神仙思想の影響が強いことを論の前提として説明し、周信の「次韻謝白雲林翁惠團茶 三首」を解釈して、茶の効用により「現実の空間」（室内）と「意識の空間」（想像の空間ないし夢）とを往還する様を解説した。次いでそうした周信の詩が中国唐代の盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」に倣っていることを指摘した。次いで周信「謝素中惠茶」に示される夢（意識の空間）の時間の進み方が現実の空間よりもずっと早いことに着目して、唐代伝奇「枕中記」の邯鄲（盧生）の夢の影響があることを指摘した。さらに、周信「謝霜月山主惠茶」には、現実の空間における無限の外界と狭い室内とを往還する想念を、茶が促す様が描かれていることを指摘し「詩人は茶の香りによって自然と融合して、「無我」の境地到る」と論じた。

朱秋而先生は、江戸時代末期の漢詩人館柳湾の作品を取り上げ、そこに詠まれる自然風物の中で、中国の詩に詠まれず、日本の風土や生活に根ざすところから発想されたものを抽出して論じた。『柳湾漁唱』初集所載の七言絶句の転句・結句「門前時に虫を売りて過ぐる有り／一担の秋声 晚涼を報ず」に詠まれている虫売りは、鈴虫、松虫など秋虫の鳴き声を楽しむ平安時代以来の日本の文

化伝統に基づいて江戸時代の町の風物になっているものであり、中国の詩には詠まれない日本独特の素材といえ、また、秋の虫売りは、江戸時代の日本文学では誹諧にしばしば詠まれていることを指摘した。続いて、案山子（かかし）、水鶏（くいな）、茄子（ナス）といった中国詩にない素材を詠んだ柳湾の詩を紹介し、これらを詠むことが、和文芸特に誹諧と共通することを指摘した。さらに、朱先生は、秋草を取り上げ、中国詩も唐代以来秋の園の植物を詠むものの、それらは秋の愁いととも詠まれるのであり、柳湾の「小園秋草花盛開」に詠まれる秋の草の色彩的な豊かさは、『万葉集』以来の日本の文学伝統に基づくことについて、柳湾「又、一絶、邦俗を用ひて呼ぶ所の花名」などを掲げて論じた。次いで、柳湾が地方の風土を詠むことに巧みであったことを指摘し、「金山雑詠」十三首が鉾山を詠んだことも、中国詩にない独特な試みであったことなどを論じた。

范淑文先生は、多和田葉子「献灯使」（初出、単行本ともに2014年）を取り上げた。2011年3月に発生した、東日本大震災および福島第一原発の事故に想を得た（ただし、直接的に地震や原発事故を描くのでない）多和田葉子の小説である。范先生は、関東大震災直後の東京を描いた田山花袋「地震の時」などを導入として紹介した上で「献灯使」の考察に入り、まず成長につれて生命力の衰えていく曾孫無名と百歳を超えても元気な曾祖父義郎との交流の語られ方、そのいたわり合う愛情の語られる場面場面を取り上げ、実は血縁関係にないかもしれない曾孫を懸命に育てる義郎、義郎を悲しませまいとけなげにふるまう少年無名の描かれ方を解説した。次いで、小説の中で、放射線の影響なのか、無名の身体が男性から女性へ転換する箇所を取り上げ、それでも異性に惹かれる無名の心情の語られることが重要であると論じた。さらに、無名も候補に選ばれる「献灯使」一鎖国している日本から秘かにインドへと派遣される子どもたち一が、希望であるとともに犠牲でもある

ことを指摘した。

以上、六つの報告を紹介した。老人が若者（若い頃の自身）を語る中に作り出されるおかしみ、葎に覆われた陋屋に住む美女という男性達の幻想、蓬莱と竜宮との振幅を生む物語的想像力、茶の覚醒作用によって形作られる現実と想像世界との往還をめぐる詩想、漢詩という中国由来の文学形式に盛られた日本の自然風土、人間という自然の生命がむしばまれる様相を描いた現代小説、「いのち・自然・社会」というテーマ設定ゆえもあろうが、多様で奥深い日本文学の魅力が見出された今回の日文学部会であった。こうした発掘を、海外の日本研究者が進めていることは、とてもうれしくありがたく思われる。